

令和 6 年 5 月 21 日現在

機関番号：32631

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2017～2023

課題番号：17K03292

研究課題名(和文)複数社会の華人女性にみる「衣装」と「化粧」 女性性と社会性の仕立て方

研究課題名(英文) Costume and makeup as seen by Chinese women in multiple societies: How to fashion femininity and sociality

研究代表者

謝 黎 (Xie, Li)

聖心女子大学・現代教養学部・非常勤講師

研究者番号：30424295

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,500,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、華人女性の衣生活と化粧文化に焦点を当てることにより、過去1世紀半にわたる中国内外の華人社会における「女性性」と「社会性」との関わり方を考察した。ファッションとしてのチャイナドレス、伝統継承を表現する民族衣装、自他の視線を意識する化粧行為という3項を観察軸に採り、個別社会(上海・雲南・台湾・マレーシア)における「時代ごとの「女らしさ」の発現、「女性性」を形成し推進する社会的力学、「華人性」の生成過程におけるジェンダーの意味合いを追究した。その研究成果は『チャイナドレス大全-思想・歴史・文化』(青弓社2020)と論文にまとめた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

着衣行為や化粧行為への着目は、他者の存在とその目を意識するコミュニケーションの身体的根源を問うことであり、さらには自我の可視的な形成の道を考えることでもある。本研究は、ファッションとしてのチャイナドレスと伝統を継承する「民族衣装」を軸に、「衣装」と「化粧」に焦点を当て、「女性らしさ」の個別社会における具体像を客観的に描き出し、「女らしさ」がその身体性と社会性に支えられる形で形成されるという議論に現場のリアリティから迫ることを可能にした。エスニシティとしての「華人性」の再編成におけるジェンダーの役割や、ジェンダー秩序のなかで受容される女性身体の意味とその操作を論じたという意義を有する。

研究成果の概要(英文)：This research examined the relationship between "femininity" and "sociality" in Chinese society both inside and outside of China over the past one century and a half by focusing on the clothing lifestyle and makeup culture of Chinese women. Focusing on three points of observation: the Chinese dress as fashion, ethnic costumes that express the inheritance of tradition, and makeup practices that are conscious of the gaze of oneself and others, it pursued the following themes: (1) Expression of "femininity" in each era (2) the social dynamics that form and promote "femininity," and (3) the meaning of gender in the process of creating the "Chinese-ness." The research findings were presented in my book "Encyclopedia of Chinese Dresses: Thought, History, and Culture" (Seikyusha 2020).

研究分野：文化人類学

キーワード：華人女性 旗袍(チャイナドレス) 民族衣装 ジェンダー 身体 化粧 アイデンティティ 社会性

1. 研究開始当初の背景

19世紀末から21世紀にかけての1世紀半は、東アジア・東南アジア地域の人びとにとって劇的変動の時期であった。植民地支配と独立、社会主義の台頭などの激動する政治背景下で、西洋的な価値観や生活様式などが、強制的であれ、内発的であれ、この地域の人々の生活に入り込んできた。それは総体として「近代化」の名を与えられてきた。外来の「近代」文化との出会いの中で、多くの「伝統的女性観」が抵抗や流用を含む融合などのプロセスに揉まれ、そこに新たな「女性性」が形成された。こうした「女性性」は、自他の視線を意識する「服飾」と「化粧」の様態に顕著にみられる。またこれらは、個別状況におけるジェンダーの問題を見える形で示すものであり、日常生活の諸分野で、女性に対して心理的生理的に深刻な影響力を及ぼす社会装置となっている。

本研究の学術的背景の第一は、この「近代化過程における女性性の可視的発現」にあり、武田佐知子編『着衣する身体と女性 周縁化』(思文閣 2012)と問題意識を共有する。また北山晴一(『衣服は肉体になにを与えたか』1999)によれば、かつて共同体の規範や儀礼のかたちで行われてきた身体行為(衣服や仮面、化粧、香料の使用)が、近代の個人主義を標榜する社会では、個人の責任による個人の営為とされるようになった。そこでの身体表象は、個と社会の関係性を構築し、調整する社会装置として使われるとともに、個人のアイデンティティ確認のための道具となったとする。この意味で、本研究の対象とする華人女性の衣装と化粧は、近代の文脈で可視化された社会的身体そのものである。

私は長期にわたり、中国本土におけるチャイナドレスの「創出」を政治的・社会史的(再)編成という背景から研究してきた(研究業績1、2)。また2016年度までの3年間は、科研費(基盤C)による現地調査を通して、モダン・ファッションとしての衣服と、「民族(を表す)衣装」という2つの服飾形態が、中国本土の外にある華人社会の日常生活や儀礼などの機会でのように通用してきたかを、通時的及び共時的に考察してきた。

具体的には、台湾やマレーシア華人社会において、人の移動とならんで、「モノ」としてのチャイナドレスという衣装がいかに国境や地理的要因による隔離を超えていったかという様相を探ってきた。そこには模倣や流用のみならず、意味と機能の転換があった。宗主国の日本と中国本土の間に板挟みになった植民地台湾の漢人社会では、チャイナドレスを身に着けるからといって必ずしも「抗日」とは限らない、「和服」を身に纏ったからといって必ずしも「親日」とは限らないという、「抗日」と「親日」の政治的な「ねじれ状態」が見られた。チャイナドレスが「女性らしさ」を表す流行ファッションとして着用されていた様態は、その「ねじれ」に絡み付いていたのである(研究業績3、4)。

一方、顕著な華人文化をもつマレーシアでは、チャイナレスの史実態はほとんど知られていないにもかかわらず、華人たちは「歴史的記憶」としてチャイナドレスを語っている。それとともに、スタイルがよくないと着られないといった「女性らしさ」をあらわすファッションとしての受け止めも目立つ(研究業績5)。ある仏教団体(慈濟)がその「女性らしさ」を賞揚し、女性信者の制服として採用したという事例も見出された。セクシュアルな身体性の強調による「女性らしさ」と、忍耐を美德とする仏教団体のしなやかさや上品さを「女性らしさ」とする見解は、一見矛盾のように見える。だが、どちらも社会的に作られた「女性性」の一面であり、チャイナドレスはそのいずれをも表現しうる装置(「変換器」として利用されていると解釈すべきである)。

私は上述の調査期間中、マレーシア・サラワク州シブ市で現地のさまざまな華人集団から聞き書き調査を行い、チャイナドレス交流会を通して貴重なデータを得た。その様子は現地新聞(2016.8.26-27の『詩華日報』、『星洲日報』、『聯合日報』)で報道されたが、そこに見られるように、この間の調査は日・中・マレーシアの三角測量的研究としての萌芽的意義を有していると自覚するに至った。これに台湾、雲南を加えて、複数の三角測量的比較を複合的に行い、衣装の伝播と意義の転換を通して発現する女性性と社会性の異同について、より立体的な像を描くことが本研究の軸になった。

また私は2014年6月、化粧文化研究者ネットワーク研究会で、「チャイナドレスと化粧 美しいのは服か、顔か」と題して講演した(研究業績6)。それをきっかけに同年、資生堂ビューティークリエーション研究所所員と共同で、「中国 日本の化粧文化比較に関する研究」に向かった(研究業績7、8、9、10)。ここでは(1)中国の化粧文化、(2)中国社会における日中韓欧化粧品の特徴と問題点、(3)なぜ「素顔美人」が好まれるか(「まなざし」と中国的「美人観」)などを論じた。第31回国際心理学会議では“Women in Shanghai: Changing sense of beauty and views of makeup”を報告した(研究業績11)。また社会的貢献の一環として2015年11月に日本の大学にて、公開講座『日常の彩り 化粧をとおして見る日本と中国の美的世界』を実施した(研究業績12)。これらの「化粧文化」の関わりを通じて、これまでの「衣装」研究の関心を、アジア地域全体における「衣服」と「化粧」の関係のあり方に拡大させることとなった。「素顔美人」を好む中国と「化粧はマナーのうち」とする日本、そして、雲南の山間部に暮らす少数民族の男性たちがもつ女性の「白い肌」を美とすることなどの事例から、身体性メディアとして衣装と同型ではあるが、顔に焦点を当てることにより直接的に個性を浮き上がらせる化粧と

いう「美」を作り出す社会的装置を考察する必要が生じた。化粧と衣装の相関を見ることによって、衣装のモノとしての流通性、越境性をより説得的に測ることができると考えたためである。鷺田清一（1999 1989 『ファッションという装置』）は、人間の身体を、「世界」へと根源的に媒介しているものとして「ルート・メディア」と呼ぶべきだとし、化粧や着衣は、このルート・メディアに可視性という位相において介入してゆく行為だと説いている。本研究の発想も鷺田と同じ論点から出発しているが、研究の進展により、化粧や着衣は社会により異なる形象をもつ可視的ペルソナを身体に付与するという事実を明らかにしてきた。複合的な三角測量的比較は、この事実を実証するための視点である。

2. 研究の目的

本研究は、華人女性の衣生活と化粧文化に焦点を当てることにより、過去1世紀半にわたる中国内外の華人社会における「女性性」と「社会性」との関わり方を考察した。中国本土のファッション拠点の上海を基点とし、雲南の少数民族、また華人文化が異なった相貌で顕著な台湾とマレーシアを対象点として、複合三角測量と呼ぶ比較の方法を採った。現地調査では、ファッションとしてのチャイナドレス、伝統継承を表現する民族衣装、自他の視線を意識する化粧行為という3項を観察軸に採り、個別社会における(1)時代ごとの「女らしさ」の発現、(2)「女性性」を形成し推進する社会的力学、(3)「華人性」の生成過程におけるジェンダーの意味合い、を追究する。これに基づき、女性性の社会的構築の様態と、社会性への回路としての女性性の形成の理論的解明を追求した。

3. 研究の方法

本研究は当初、5年を研究期間としていたが、コロナウイルスのため、現地調査ができず、余儀なく2年間を延長した。期間中、中国本土、マレーシア及び台湾の現地調査(オンライン調査も含む)を行い、その結果を分析して綿密な対照比較研究を行った。衣と化粧の流行傾向や民族衣装と華人アイデンティティに関わる文献の収集を行い、編年的推移データを整理した上で、影響・系統などの関係を裏付けた。文献収集の軸は植民地政府と独立後の政府による公刊報告類、新聞雑誌、各華人集団の発行物、民族誌的な刊行物などにおける当該問題への言及箇所であった。これと並行して、現地華人と出身地別会館組織でのインタビュー、華人及び他民族の文化的活動と日常生活の場を衣装着用・化粧実践の現場として選び、観察と映像記録の作成を行った。観察と映像記録は被調査者にフィードバックし、その評価を高次のデータとして三角測量的な調査の重層化と複合化を行った。

(1) マレーシアでは、華人文化の研究者の陳劍虹氏(マラヤ大学)、蔡增聡博士(サラワク華族文化研究所)のほか、福州公会(劉久生主席)や興化莆仙公会(蘇徳旗会長)をはじめとする各華人会館、林子明文化館などを訪ね、情報を収集した。また、具体的生活の場での衣装と化粧の実践記録を映像として撮った。どのような場面で、誰がどのような化粧をし、何を着ているか、またそれ見る人は誰か、誰に見せたいのかを活写する方向性の端緒をつけた。そのために、ファッションデザイナー(林義清氏)やチャイナドレス・ファッションショーのモデル(龔愛莉氏)など、多くの華人専門家から協力を得ながら調査を進めた。シブでは、現地華人生活文化館や出身地別会館、ペナンでは華人文化とチャイナドレスの老舗(Emerald Brilliant Cheongsam Boutique)、慈濟というチャイナドレスを制服とする仏教団体などを調査した。民族衣装やチャイナドレスの老舗(「常常来」)の鄭金芳氏、ペナン仏教慈濟基金会女史組長周濟帆氏、ペナン華人大会堂の洪森合氏などの聞き取り調査も実施した(2017、2020・2021 オンライン調査)。

(2) 中国では次のような調査を行った。上海では、上海図書館や上海档案馆、華東大学図書館などの資料館での、19世紀後半から21世紀までの雑誌・新聞・写真・論文資料を収集した。また、東華大学紡織服飾博物館、海派チャイナドレス芸術館、上海紡織博物館、上海藍印花布館、長樂路チャイナドレス街、茂名南路チャイナドレス街、資生堂の上海研究所などを訪問し、聞き書き調査を行った。雲南では、少数民族が多く暮らす紅河州彝族八二族自治州金平県にある蒙自(都市部の少数民族)と南科集落(山間部の少数民族)での調査を行った。現地の研究者の李朝春氏(紅河州博物館の主任研究員)、普亜強氏(八二族研究所の主任研究員)、白永芳(雲南大学教授)などの協力を得て、必要な調査許可の手続きなどを進め、少数民族と漢族華人の「女性性」の異同点を探り、エスニック集団の形成との関連で女性性がどのように位置づけられているのかを調査した(2017、2018、2019、2022、2023、2020・2021 オンライン調査)。

(3) 台湾調査では、台北・台中・台南を分けて聞き取り調査や資料調査を行い、図書館や博物館、また華人民俗資料館の文献資料の収集も実施し、主に生活様式や風習について、老若男女の世代別による聞き取り調査を行った。とりわけ、民族衣装の着用状況を生活の文脈に即して捉えることを中心に行い、華人社会と現地社会の互いの影響、自己と他者を区別化するために、何をもちょう表現するのか、その際の衣装と化粧の役割についての聞き取り調査と映像資料作成を実施した。現地調査では、衣装資料も収集した(2018、2020・2021 オンライン調査)。

4. 研究成果

本研究では、上海をファッション変遷の軸とし、そこからの中国南部少数民族、台湾(植民地下と民国下)、東南アジア華人(マレーシア福州人)への衣装(時装と呼ばれる流行衣装とチャ

イナドレス)を複数の華人社会における女性性発現の対照比較を複合的に行った。

異なるバックグラウンド・地域の華人たちから聞き書き調査を行い、自他の異同に関しての評価を行ってもらった。これにより、複合的三角測量への被調査者の参画を得、「女性性」と「社会性」に関わる多層的な言説資料をまとめて比較分析し、立体的全体像を描いた。

とくに、旗袍(チャイナドレス)の歴史的変遷や由来を踏まえたうえで、民族服や伝統服、ファッション(文化大革命期の軍服を含む)と身体・ジェンダー・セクシュアリティ・革命・華人・植民地支配・歴史性とファッション性・美意識などに複雑に絡まっていることを考察した(研究業績:13)。また、旗袍や唐装、漢服にまつわる服飾伝統の論争や、ミャオ族の女性たちの旗袍姿にみる「民族服」の在り方、「改良版」の民族衣装の流行と「伝統的」民族衣装のあり方が、民族集団の境界にどう影響するのかなどに関する研究発表を行った(研究業績:14、15、16、17、18、19)。

これらの研究を通して、自他民族の間、自民族の内部において、「好看」(きれい)と思われる民族衣装の特徴は何か、同調性の美意識と集団間の差異の主張にどのように作用しているのか、民族衣装のファッションショーや伝統衣装と改良型、民族衣装の市場化などの事例を取り上げ、伝統と流行の狭間に揺れる民族衣装の実態を考察し、新たな視点を提示した。

最後に、本研究は「華人性」の生成過程におけるジェンダーの意味合いを追究するもので、日本における中国及び東南アジア理解に新たな視点を提供できたのではないかと思う。また、収集した実物の衣装は大学の講義や博物館での展示で公開した。たとえば、2022年5月12~10月5日にかけて、「美か束縛か 纏足・コルセットの歴史と#KuToo運動」と題する展示企画を聖心女子大学グローバル共生研究所の主催で行った。そのほかに、いくつかの大学で学生と社会人に向けた講演を実施した(聖心女子大学2022、都留文科大学2023など)。

本研究は、国民に向けた公開展示をより一層充実させることにより、服飾の文化的意義を広めるとともに、同様の知見を現地社会にも成果還元できたと考える。

研究業績

- 1、謝黎(単著)『チャイナドレスの文化史』2011 青弓社 総 148 頁(査読あり)
- 2、謝黎(単著)『チャイナドレスをまとう女性たち』2011(2004) 総 224 頁(査読あり)
- 3、謝黎「植民地台湾における旗袍(チャイナドレス)」『東北芸術工科大学東北文化研究センター研究紀要』第15号 pp.99-106(査読なし)
- 4、謝黎「植民地台湾の旗袍(チャイナドレス)に関する一考察」国際服飾学会第34回大会 2015.4.25(査読あり)
- 5、謝黎「マレーシア華人にとって旗袍とは何か? - サラワク州シブ市の華人社会を事例として」国際服飾学会第35回大会 2016.4.23(査読あり)
- 6、謝黎「チャイナドレスと化粧 美しいのは服か、顔か」、化粧文化研究者ネットワーク第30回研究会、株式会社資生堂ビューティークリエーション研究所、招待講演、2014.6.21
- 7、謝黎「中国社会における日中韓欧化粧品の特徴と問題点」資生堂共同研究発表、2016.2
- 8、謝黎「なぜ『素顔美人』が好まれるか? 化粧への『まなざし』と中国的『美人観』」『歴史遺産研究』2015 NO.10 pp.37-42(査読なし)
- 9、謝黎「日中における美意識・美人観に関する比較研究 中国の化粧文化、『面飾』の歴史」資生堂共同研究、2014 年度報告書(査読なし)
- 10、謝黎「中国の化粧(妝)文化 『面飾』の歴史」資生堂共同研究発表 2015.3.18(査読なし)
- 11、謝黎“Women in Shanghai: Changing sense of beauty and views of makeup” 第31回国際心学会議 2016 冠シンポジウム、2016年7月24日(日) 29日(金)、会場:パシフィコ横浜(査読あり)
- 12、謝黎「日常の彩り-化粧をとおして見る日本と中国の美的世界-」東北芸術工科大学公開講座 2015.11.1
- 13、謝黎(単著)『チャイナドレス大全 文化・歴史・思想』2020 青弓社 総 228 頁(査読あり)
- 14、謝黎「現代中国における服飾伝統をめぐる論争 漢服・唐装・旗袍(チャイナドレス)を事例として」日本文化人類学会第54回研究大会 2020.5.30(査読あり)
- 15、謝黎「チャイナドレスをまとう中国ミャオ族の女性 「好看」にみる同調性の美と集団間の差異の主張」日本文化人類学会第57回研究大会 2023.6.4(査読あり)
- 16、謝黎「なぜ、漢服は右衽にこだわるか 中国服飾文化にみる右と左の象徴性」国際服飾学会 2021年度第1回研究会 2021.7.31(査読あり)
- 17、謝黎「なぜあえて右衽を強調するのか? シンボリズムからイデオロギーへ、漢服の展開」『国際服飾学会誌』2022 NO.61 pp.27-52(査読あり)
- 18、謝黎「中国少数民族の髪型と頭装飾にみる集団間の境界」国際服飾学会 2022年度第2回研究会 2023.3.4(査読あり)

- 19、謝黎「伝統と流行の狭間にみる中国少数民族衣装の揺らぎと再構築」国際服飾学会 2023 年度第 1 回研究会 2023.7.29 (査読あり)

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計6件（うち査読付論文 4件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 3件）

1. 著者名 謝黎	4. 巻 3
2. 論文標題 纏足から放足へー中国女性の装いと身体性	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 聖心女子大学グローバル共生紀要	6. 最初と最後の頁 校正中
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 謝黎	4. 巻 61
2. 論文標題 なぜあえて右衽を強調するのか？ シンボリズムからイデオロギーへ、漢服の展開	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 国際服飾学会誌	6. 最初と最後の頁 27-52
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 謝黎	4. 巻 16
2. 論文標題 化粧へのまなざしにみる中国女性の美的価値観の変遷	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 東北芸術工科大学東北文化研究センター研究紀要	6. 最初と最後の頁 25-30
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 謝黎	4. 巻 3
2. 論文標題 纏足から放足へー中国女性の装いと身体性	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 聖心女子大学グローバル共生研究所紀要	6. 最初と最後の頁 校正中
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 謝黎	4. 巻 第27号
2. 論文標題 1930年代上海のモダンガールのライフスタイル 女優の日記を基にして	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 東北芸術工科大学紀要	6. 最初と最後の頁 1-16
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 謝黎	4. 巻 12
2. 論文標題 マレーシア華人にとって旗袍 (チャイナドレス) とは何か サラワク州シブ市の華人社会を事例として	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 歴史遺産研究	6. 最初と最後の頁 49-63
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計11件 (うち招待講演 4件 / うち国際学会 6件)

1. 発表者名 謝黎
2. 発表標題 中国女性の身体と装い 纏足からチャイナドレスへ
3. 学会等名 都留文科大学ジェンダープログラム (招待講演) (招待講演)
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 謝黎
2. 発表標題 伝統と流行の狭間にみる中国少数民族衣装の揺らぎと再構築
3. 学会等名 国際服飾学会 (国際学会)
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 謝黎
2. 発表標題 チャイナドレスをまとう中国ミャオ族の女性 「好看」にみる同調性の美と集団間の差異の主張
3. 学会等名 日本文化人類学会（国際学会）
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 謝黎
2. 発表標題 中国少数民族の髪型と頭装飾にみる集団間の境界
3. 学会等名 国際服飾学会（国際学会）
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 謝黎
2. 発表標題 装いの揺らぎと再構築 民族集団の「境界」の表し方
3. 学会等名 南山大学人類学研究所
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 謝黎
2. 発表標題 旗袍の思想 チャイナドレスの伝統とモダン
3. 学会等名 日本上海史研究会（招待講演）（招待講演）
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 謝黎
2. 発表標題 中国女性の装いと身体性 纏足からチャイナドレスへ
3. 学会等名 聖心女子大学グローバル共生研究所（招待講演）（招待講演）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 謝黎
2. 発表標題 中国女性の装いと身体性 纏足からチャイナドレスへ
3. 学会等名 聖心女子大学グローバル共生研究所（招待講演）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 謝黎
2. 発表標題 なぜ、漢服は右衽にこだわるか 中国服飾文化にみる右と左の象徴性
3. 学会等名 国際服飾学会（国際学会）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 謝黎
2. 発表標題 現代中国における服飾伝統をめぐる論争 漢服・唐装・旗袍（チャイナドレス）を事例として
3. 学会等名 日本文化人類学会（国際学会）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 謝黎
2. 発表標題 マレーシア華人女性の衣生活にみるファッション性と政治性 サラワク州シブ市華人社会を事例として
3. 学会等名 国際服飾学会（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2017年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 謝黎	4. 発行年 2020年
2. 出版社 青弓社	5. 総ページ数 228
3. 書名 チャイドレス大全 文化・歴史・思想	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関